

特116

710



5 6 7 8 9 18
60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 18

始



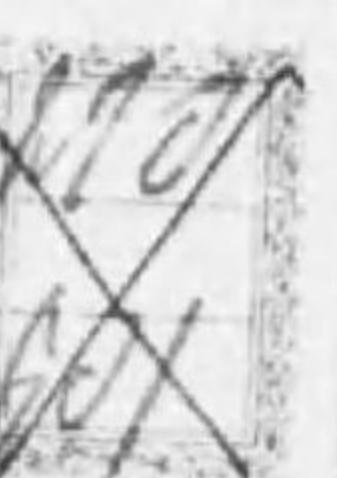
觀世流改訂舊本

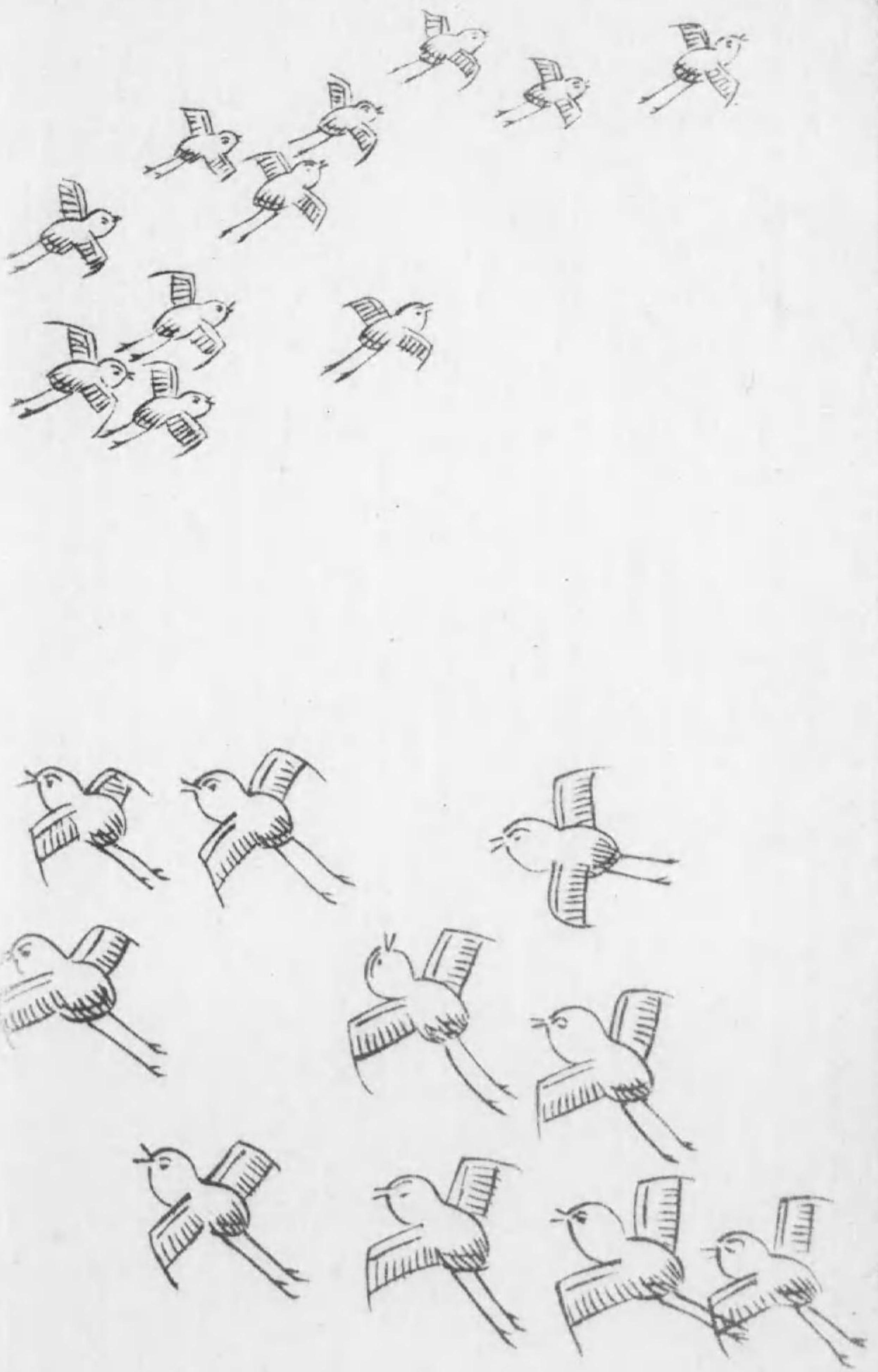
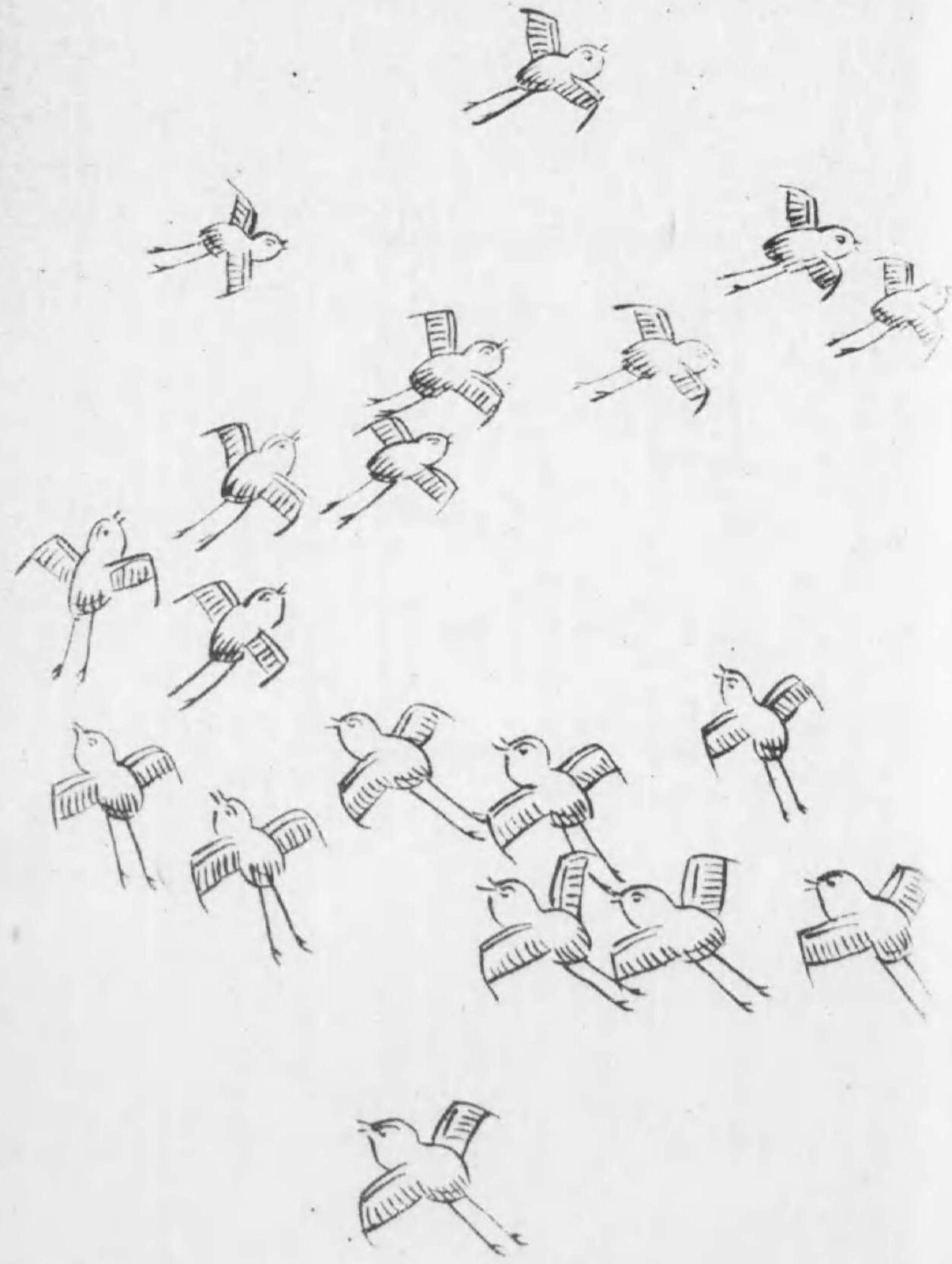
外七

特116

710

吉野天人
太佛供養
忠信
鳥帽子折
大瓶猩々







93
116
7/10

之清觀
長之世



解題

都の者吉野山に遊びたるに爛漫たら桜壳の下に天人隠れ、五節の娘の昔をさかからに身ひりと作り。能手作者註文に小次郎作、二百十番は日録に要請作とあれども、作文精緻未だ全く記録を見たる章句多く、地圖に比し速に後作等をこと題を掉じ餘地無し。謡曲の古典に詠ひ方梗概

詠ひ方梗概

が里女に装へらるゝれば、超俗的氣體育りて優に品良かるべし。詠ふを宣へとす。シテ天人前はもつくりと絢爛に出て、問答は一と高かに言ひ、掛合に至りて處も山蹊のは静に少しがくつて誰ふ。次の詞は前すには少しがくつて假ひ地渡り崩の替らこそ少しがくつりと坦ひ、長岡なる心ひうべし。次の詞は事無く起し、御覽りにて軽く氣を更ふ。問答に入りよりと地に處す。不思議や虚室に云々は詩ながら聊か健やかたさらりとしたる味はひなくや。地通すて崖やかにせらりとあら中に待ち候へとを確りと一まひ、句末の一宇彦を中にはす。アキラルも、唐茅は角作りと出で、通行は少しがくつりと坦ひ、美景にすりてより朗かに、巻と樂む心ほえなきよ。アキラルの上歌は物静に出で必ずこゝにまちらんとをもつくりと、並陵類物の坐を前へかけ、確りと一たる位にて落ひつけ止めの近一にて鏡む様のこれ落まれる御代とかやは禮りと承く。いもあへねば云々は大乗りにて湖子引き立てゑゆかに浮ひ然の舞ふとかやを少しがくつて假ふ。幸りはうちはよく揚げりとあらく。アキラルの雲路を立といへるを胸にたき、桜壳の中すも路を雲路に喻へ、雲路のまにまにき房はんと居る。都方都又都の附近の風俗。千本の櫻

吉野の一日千本に出てたる例ひれど、後嵯峨上皇吉野山の櫻を千本の櫻の豫より一ルのと云ひは、故曲もこれに基きて制ぐ市れり。通曲が嵐山以後の新作なることをも推すれたる。三吉野

吉野の奥を行き房はんと居る。都方都又都の附近の風俗。千本の櫻

吉野の一日千本に出てたる例ひれど、後嵯峨上皇吉野山の櫻を千本の櫻の豫より一ルのと云ひは、故曲もこれに基きて制ぐ市れり。通曲が嵐山以後の新作なることをも推すれたる。三吉野

文學博士
井上頼国木文監修
明治四十一年
丸岡桂堂解説并補訂
觀世音院刊行會
大正五年
山崎樂堂桂子附訂正
大正十年
山崎樂堂拍子附再訂正

いふに圓ト。吉野は大和國吉野郡。**和州** 大和 下向 尊き地ナリ年一き地に向 櫻の花心 花相
の山地。古來櫻花の木勝たり。下向ふ謂之下向」といふに圓ト。 櫻の花心花を思ふ心の花の名。これは
に寄する雅情。櫻花桜木にも「櫻め」といふ。色香に深むや。花を思ふ心の花の名。(これは
どしいてやさくらの花心などあり。) ことの深きを深緑にあいかく。更へて
す以前の花木には「も居に深みて」。深緑葉すりかけて。白露を玉に小ぬける春の脚色を
更へて。花色 木立つ所。木立つ所。次作が後作なることを宣ふにあら。朝トめり

氣色立つ

(きは色美一)花の色といふべきを花色と作れる事と、辭は古から。。。

周古今集に出てたる、唐ふ適明の五節の舞娘を見てよりう兼に「天の風雲の通路ふま」とちよウ女の姿一ぱーとくもとあるを引く。原歌の意は、天の風よ雪の通路を塞ぎて天女の青の姿を今昔に留めとす。霞も靡く古今集の歌春霞たなびく山のさくら花うつろはむとや色かはりゆくを轉用す。うつろふとは色の褪せゆくこと。

三番目

畠能

吉野夫人

三月

ワキテ天女(前ハ里大)

早次第上花の雪と踏をきくべよ。花の雪と踏を
あくべよ。吉野の奥を尋ねん

早朝

あれハ都方よ住まひきう者よそい。諸
もわれ春よあうづへば。どくかーとの花
を。覧仕。中とも千本の櫻を年シドシ
よ眺め。此千本の櫻へ。三吉野の

種取人 花と草う及ぶぬ向。若き
道行上
此度まへ和州よト向仕ふ
伴ひ。此度まへ和州よト向仕ふ
柳の香ハ殊よ櫻の花心。此度まへ和州よト向仕ふ
青色に此春もかくも伴ひ。此度まへ和州よト向仕ふ
柳の香ハ殊よ櫻の花心。此度まへ和州よト向仕ふ
けりか花の囊もじや。此度まへ和州よト向仕ふ
色の朝私。此度まへ和州よト向仕ふ
山よ著きよけ。此度まへ和州よト向仕ふ
吉野の氣色。此度まへ和州よト向仕ふ

山よつまけり
早晴
春がる程よ。され
はやま野の山よ著きて。ほほ覽
嶺も尾も。花も。猪も興
けふ。やと。農ひゆ
あそび。何事と。竹せゑぞ
あそび。
あそび。都の者きてゆづ。此と古野の
花を承る。ひび。始めて此山もあるか

て。又見申せばやどをあわすや。安あづ。
此山中よしとを給ふべし。あるへも
あたりゆそ。シテ、此あたりよ住む
者ある。春立つ山よ日を送り。かみから
花を友とす。山野よ暮もさむ
あり。ヨリ、けよく花の友人。他まの
縁としむかる。あれらも同一其ぶ

・小説

シテ、處も山跡の。早友あいや。見も
せぬくや花の友。見むせぬくや花の友。
知るも知らぬも花の蔭よ。金匱宿り又
して諸人の。うえス、叶れて花衣の。
袖うへて木の下よ。立ちゆういざや眺
め。けよや花のもとよ。事らん事を
あく。美香京よどうて花び駄れ

地上歌

初めぞ眺め。いざ駆れて眺め。ふ。
さよゆみじた事の。かやうよ家路
を走て花を眺め給ふ事。いよく不
審ともぞ。けよま不審ば序理。
今が何をか包ひ。其ハわれは天人
ある。花よ引かれて。あつたう。今宵
とよ旅店にて。信心を致し給ふ。

と。其まへの五節^合の舞。小忌の衣
の羽袖^{カスミ}を返す。月の夜遊^{カク}を見せ申
す。転らくとよ待ち経へて。外映
白ふ花の蔭。夕映白ふ花の蔭。月の
夜遊を待ち経へ。少女の姿現して。
よもとよまえらんと。迦陵頻^{カク}の聲
ぞあり雲よ破りて。生せよけり雲よ

來序中入

ワキカニ上

不思議や虚空すよ音樂聞え異香薰

ツヨク

花降れり

地打打通これ流されうち△脇能ノトキ下リ端
△ノ他ノトキ出端代打打通トキオト△下リ端上歎打打通そひもあくねぞ雲の上△出端モヨクル打打通そひもあくねぞ雲の上

筆簾簾金鼓羯鼓や京竹の聲登み

渡る春風の。さつや女の羽袖を返す

獨吟仕舞

花よ戯れ。舞ふとすや 中一舞 上
 紫度君づ代を。少女ハ紫度君づ代を。
 摂てー巖も。つまらせぬや。春の花の。
 梢よ舞ひ游び。飛ひあざり飛ひ下る。
 げとも上あき君の惠。はある國の天
 つ風雲の通蹟吹き。圓づるや。少女の姿。
 留まつ春の。霞殿の靡く三吉野の。

吉野の山櫻うううと見えう。又咲く花の。雪よ
咲く花の。雪よのう。又咲く花の。雪よ
のうで行くも知らぞぞ。ありよけ。

大佛供養

解題

平家とびて後、其邊臣恩と兵府景清常に頼朝を襲撃したと謀り、南都大佛供養の日、社

人に扮して頼朝に近づかんとしたらも見破られて終に手さざりしことを作れり。此事蹟は同様く平家の邊臣中務宗資に就きての事かならずや。廣西作者景清の名ためて、これに接ひつけたり

と見る。能本作者達文に作者不明。別名を秦良語ともいふ。景清の事を作れる曲別に景清あり。

謡り方梗概

全般のさらうとし、たる曲柄なれども、春花に富めらを以て、よく文意をあらはりて謡ふべし。シテ

忘れた武士の魂を尊と

し、然も通じてさうしたる往を取らす。先づ次第は表書きありて確りと謡り、名前以下詞は花くならぬう廣きくとあるべく、承りゆへばして脚が東を更ふ。シテは亦懷なれども、沈むべからず、下教にて捨静に上歌よりは又さらりと謡ふべし。上歌のや「持すまし」の打切前を一度謡り鎮む。母と母の問答は重々とおもて遊けて丁寧にハキくと言ふ。「軽らく」はものほかに前へかけて出次下に持を更へて稍下に抑へておもて、「これは思ひもよらぬ」ちとはわつて應へ思へばねらひやすからずを確りと詠みに止む。耦合は火くさらりとあらはし。はや夜の明けと云ふは素直に言ひ、げたありかなき云くは身に一める心にて火く静た地に渡す。延度し前の一宇甚は中音にて抑ふ。後は前と西向を一度交へて方柱をもとすべく、面白や云ふとは健やかに出て、調に移りて稍氣をかけ思へば、兵府景清としを確りと白張の二字をもつくりと起して以下さらりと言ひ、姿にちをわつて出う衰れをもとと心持をつけ、富人のもう聲の調子に更へてかかつて謡ふ。人などがめをもとくは確りとあらはし。フ寺との問答、初はうあらぬ林たて何氣なくさうと應へばのう水波のうちは前へかけて出、佛も神も同一聲しと確り、耦合にならう。あらはれけるか由張のには抑へて強く謡ふべし。其時景清と云ふは確りと出で、太音あけて呼ばうけりと大きくどつくりとガルは聲上づらす又

こせつ必ず最も勇健に名告り上ぐべし。母

母

の二聲をもつくりと起して度りゆくもさくマ底めす。さて此程けしきは家の内の對話なれば、接別に出づ

にて少しそれに附けたり。次の調「がまへて」云ふは稍確りとあらはし。耦合

にて勢よくハキくと謡ふ。

立衆

出の二聲は健やかにすらりと扱ひ、ゑくもは頼朝の調子、大伽藍の声供養うち確りと詠ふ。

ワキ

往普通にテキハキと扱ふ。又外局の二聲とは確りと並け、二字落は上歌前をれば終を

十分に抑ひ、調の「こは何者なれば」云々は氣をかけて凜々として言ひ放ち、以下間答、異命はシテを舛す
ものなれば、譲東駒かも運び事なく強みに承け渡すべし。」言譲通断の事しきは確りと出て餘り高く
なきらぬやう獨言つ跡に言ひ、「いかにやいか 地 初の「寝ませて」云々は氣の抜けぬやうに附け、「景清が心の
たより改めて大きやかにかゝつて謹ぶ。 地 中母も衰と」と心持有らべし。一門の形のうちしきとの上教
は景清と用文なれど、曲柄の軽重異れば姫にもとは猶さらりとて確りとつたら處を謹り、高く流すにな
らぬやう心す。林の森の「まほせて」めやねに出て、「いつか親心」を少くさらりめにとり、「景清も」以下
奉事大龍じ止む。續の「今日はかりこそ」あくはシテを承けてそなよりも運び好く、塵に又はらしとて靡
りと取りて終の「立ち出づる」をかいつて謹じ切る。鞠つまうたらしきには十分に氣をかけさせて思ひとつ、しよ
りかへて運ぶ。畏つてゆとて「云くは確りと兼けて次向より騒かくからぬやうすらりとかから、」名のりありあ
へず「以下は秀達大龍じ進み、「今は景清」より少しく心持を更へ、霧立ちかくすやし、以下強々と運びひむ。
あすれは草の云 ばせ居ら由を縱ら、藍深川の波第、忘れは草の名にあれど是ふは人

詩解

立解
あすれは草の云
の面影と同工なり。いづれかいづれを學べらんや。元鎌殿益田天和本隆
本には忍ぶやうき身をもらん。あり今我身と誰ふは後世の歴史なり。
本、感襄記等に其晩年の記録一絶せず。此曲には大佛供養の日頃朝を誓ひし事を作りたれど、此寄其義を企てたらば、平家の侍薩摩守務宗資（一本中務正宗助、又家資とも、但云史に無し）にて景清にあらず。思ふに長門本平家物語に「六年（延久）三月十三日大佛供養あり、平家の侍上總源七兵衛景清、鎌倉殿へ隣人に參り、なれば御内侍門尉義盛に預けらる、昔平家に候ひ（やうに少くも口へらす、御内侍門尉に所をも置かず）一座をせめて盃先に取り、或は縁の側に馬引き寄せ乗りたりなどしてありければ、もて預け給へと申しければ常陸國住人八田有清門の尉知家に預けらるし、又上總源七兵衛景清は隣人に參りたりけり。大佛供養の日をかぞへて延久七年三月七日にてありけり。湯水を上めて終に死にけり。あるより作者興を覽え、中務宗資の事柄を景清の事と一とて作れりと見ゆ。宿願（白頃よ）
景清の事は別に景清に作られたれど是も據明ならず。の山腹
參籠（奇に參り日夜籠）
大佛
南都東大寺に在り。もと聖武天皇の修建營にかくりても法
事中平重衡に焼かれて殿宇灰燼に未だたり。かば、頃朝
再建をすまし、建久六年三月十二日（玉海、其妻也）
観て禮みて供養の法會を行ひ一なり。若草邊
山の中、東大寺の東の小嶺。向頃會面
花

隆
惡大兵衛景清
の侍にて武名殊に著えり
後朝を襲ひし事を作りたり
（但元史に無し）にて景清
侍上總悪セ矣漸景清鎌倉
公少一も口へらず、和田左衛門
どしてありければ、もて扱ひ
思思七無漸景清は降人た奉
止めて終に死にけり。少一とあ
る頃頃より
頃頃より
清水

清 郎兵衛、伯父
きよし、平家物語
たれど、此奇襲を企
て清にあらず。思ひに
跡倉殿へ降人に參り
門に所をも置かずす
被ひて他人に預け給
奉りたりけらば、大
てあるより。作者興
清水寺。京都
安東八坂の東南
甍にかくりこむ。法
なりしかば、預朝

紅葉 平家の葉
年を渝ふ。 王奇、永の秋の事 奇永四年(文治元年)三月平氏の西海に亡びて渝ふ。平家物語にて奇永の今は秋の紅葉と落ち葉でゆすり繫がぬ松の上の豪きを浮きた通はせて形をよび起し。君の權しよづくむ。 え笠山の神の神陰を頼むといふ祠を特じて頼むじ母と亡ぶつぐ。幕木は故にうして信濃の國原に義といへらゆにて用ふ。え笠山は春日明神の社地の山の總名。今後大寺へらるえ笠山にあらず。 神も教 春日の神も母の比せた生存し居る事を教へ給ふの意にや。次の社虎は春日の神虎教をひき。 春日の里 奉良の古き風情。 南無 佛に向つて般舟を詠み。 二世の諸佛 過去現在未來の諸佛也。 今めかき こと及ぶたる。 果 死期。 風に漂ふ云々 平家が寄る方も無く舟に漂ひしを風に任せ。 教經 平教成の子。瘦瘠の役に海に投げ物を思へば。 身のゆく末など様々起きしせず。

詣する様思ふ心元禄本以前たゞは己が名の云思ふには宛然自分の名の頭字の如く恩心を述べ。白張津衣知らんといふを白張べかく白張は社人仕事等の事。立烏帽子身を軽き社用ハるものとは別なり。桶の芭葉の云姿にたまるとすふ意にちひかく古今集に奈良る庵達の鳥帽子。公卿などの布の袴衣。津衣は清津なら衣の意。天が下雨にかけ事ぞれか。天が下て出す。次安を暫く狩衣姿を借るを狩衣にかく。伊勢物語(後撰けふばかりこそたづも鳥くたかる)。座に立火も云座に火もとは和光同座の意にて神さへ翁さまとはたきならしくなる意。室寺は神佛混淆の社又は寺を云ひたる詞。春日大明神の社地から寺なればわく作り。春日春日神社神に仕ふ水波の瀬。水波の瀬に立ち火もとは和光同座の意にて神さへ坐に坐縁し給ふなればまつて景清の社人の姿にて供養の場所に立ち火もとを坐め給ふ勿れとなり。室寺は神佛混淆の社又は寺を云ひたる詞。春日大明神の社地から寺なればわく作り。

春日をさす。御奴神に仕ふ下人。水波の瀬。水波の瀬にて二たあらざれば物の不一不異に應じ。佛も神も同一體神佛も歸する所同一體に外ならずとかう。貴賤の事云貴賤をはめ法會な具足鐘以下具足の金物の光を放つを轉じて打物の事に云ひ及び詞の詠りたるもの之意。さらぬやうにて何事もなき様子にて言語道断。言語にて云はん方をきむ意。景清が若武者を討ち殺したるをいふ。霧立ちかくすや。景清隱身の術を行ひ

四五番目

大佛供養

九月

テシツテシテ
立衆キ方テ
從従者

景清母
源賴朝
者

シテ波第上ヨワク
わまれ草の姿よ向きて。わまれ
草の姿よ向きて。忍ばや我身ある
らん。これ平家の侍惠七兵衛景
清よそはわれ此向ハ西國の方よりひ
りよす。宿願の子細ありより。此程まか
りよす。清水よ一七日年範申しては。又

承りて。南都大佛供養の由申ゆ。
其も若草。島邊よ母を一人持ちて。は
程よ。やうのきうふ。貴賤よ紛れ。
向顧のため。唯今南都へと急ぎ。は
あざれやげよまへ。さくも榮え。花
紅葉の。事。秋の。いわれば。思。そ
ぬ風よ誘ひて。さくも馳れよ。都
の。室。ひかず鄙の憂。をも。まひ
ト教。タテ。敷。がぬ船の。さびも。なく。うきの。家。よ
生。れ。來。て。上乘。三笠。の。森。の。さげ。頼む。
ミ笠。の。森。の。さげ。頼む。其。は。ま。の。あ。づ
ら。く。て。未。た。此。せ。の。門。も。ま。ひ。神。も。教。の
社。鹿。鳴。く。春。日。の。里。よ。著。ま。よ。け。り。春。
日。の。里。よ。つ。ま。よ。け。り。意。ざ。い。程。よ。

南都若草。身邊よ著まし。此もたゞ
玉て御ゆくを尋ねざりと存す。
さても我ら子の景清。此程しづくよ
あらやうん。南無や三世の諸佛。我ら子
の景清よ。こなび達をせて賜ひ給へ
いきよ案内申す。 我ら子の聲と
聞くより。覺えをぞ極む立ち坐てく。

景清あるかと悦べ。 較らく。あたり
よぐもやいらん。其が左をだ仰せられ
あ。いよそは。 まづとあなた渡り
つ。さて此程へ。づくよひつぞ
がんば西國の方よひ。 宿願の子
細あつよう。都よより清水よ。糸籠
申所よ。大佛供養の由承り。程よ。

かうのわうが。貴賤よ紛れ。音
信の為よまうて。カトハ嬉しくも
あり絵ひて。又尋ね申せば事のふ
つまむ申せば、シテ云ふ。今めが
き行か何事ともわづへ申しよげり
ぞうそく。眞や人の申せば。頼朝を
ねらひ申せと聞け及びては。眞こそ

ゆ。シテ云ふ。思ひよらぬ行ふて。
さうあら。西海までこじり絵ひ。度一
門の門吊ひよもあら。かと。思ひだね
らひ申せば。申せとどかにかの事
ある。明日さも知らぬ老の身の。
果ても見届け絵へか。シテカドニ。風よ漂
は舟の。表経の門供申せどと

物を思ひ起さむせも
 寝も
 さて便を明るや。この身を隠す
 もじみあく。景青（上歌）のうち。母も哀れ
 思ひゆせ。一門の船のうち。一門の
 船のうちよ肩を比べ膝（下歌）をくみて。處
 狹くもじ日の。景青ハ誰ようも虚座
 船よあくと通ふ事。一類その以下

武略（上歌）をもくよ多ひれど。石をさう
 様の舟よ乗せ。ま従隔（下歌）ああうへん。
 れも義（上歌）めたり。一身の。興驛（下歌）も老
 いぬも。駕馬（上歌）よおううかくあうう。
 はや夜の明けては程よ。ア暇ゆは
 サまぐて身をよく。慎みて重ね
 てまう給ひ。げよありがたき

母の慈悲。阿闍梨のまも頼も。き
地蔵
作の森の雨露の。作の森の雨露の。
梢も濡きて我袖を。さすりやねたる
庭が。そよぐ親心か。む母の門
送り。景清もあるとを見返して後と
ちよ別れけり。後と共よ別れけり。
立葉瓦上
せよ隠れあきだ。伽藍。佛の供養。急

ぐあう。打とれ。源家の官軍。右
大將頼朝と。我事あり。
も此身す。聖武天皇皇帝の。建立。大
佛殿。と。あやし。まも。翠。この君の
阿闍梨。今このあさまよひより。
大伽藍の。供養。大伽藍の。供養。
光りかやく春の日の三笠の山よ影。

高き。ものうち聲の様とよ。供養をも
まご。あり。がたき供養をも。もぞ。あり
がたき。面白や奈良の都の時め
まも。よう。飾り物。あれ。いそくよん
うきやへて。敵を討たん。謀を。思ふハ
じ。か。の。悪七兵衛。景清と。よそよも
それ。ひや。白張津衣よ立鳥

帽子。げよあひ。あぐら。思ひ。さざる。婆よ今
植の葉の。時雨降り。おく。天づ下よ。身
を隠す。かし。便あむ。思え。身の累そ
哀。ある。上。宮人の。姿を。軽く。狩衣
けふ。もう。とどく。翁。まじ。人。かどく
ゆ。神だよも。スミ。地主。スミ。人。かどく
供養の場よ。立ち出づる。こひ行者

あれども前向むくまづぞと思ひ
シテ、といへ春日のか奴あらう。けあの
佛の所供養。場を清めの役人あるを。
何よとすめ給よしん 早カ止 春日祭よ
あらうこそ。これハ佛の所供養シテ の
水波の隔と聞く時。佛も神も同
一體。其上貴賤の事ある。何ぞ簡

み縫ひべき 早カ止 包むとまへと神ハ猶
君を守りの所感光 早カ止 顯れけるが白
張の 早カ止 脇よう見ゆる具足の金物
光を放つ 早カ止 打物の 早カ止 鞠つまうたる
謂のま。左のれと責められば。顯
れたりと思ひつ。さらぬやうも立ま
り。又人影よ隠れけり 早カ止 言讀道

断の事。唯今の者といふある者ぞと
存してゆべど平家の侍衆七兵衛景
清とは。さへ我が君をねらひ申しきを
存の程よ。故に國の者より申しつけ討ち
そらせややと存す。いとよやいとよ
敵圍の兵カニ上タよ聞け。唯今見え
志へ者をばや討つ取つて無くせよ。

さも高聲よ下知をば。豈つて
ゆき。やねて用意の敵圍の兵皆一
同よ立ち騒ぐ。其時景清又立ち
坐り思ひやう。とこまち思ひてひら矢
の船厚カニ上スヨウシテシテ
おち合ひて。重ねて時節カニ上を待つべと。
大音あげて呼ぶ。けり。抑れり。

平家の侍。愚十兵衛景清と
りもあくぞ。あざ丸を。左のうもあくぞ
あざ丸を。もうりと抜き持ち立向ひ。
大勢よわつて入れど。さも固め
驚き固ひども。甲方。もうとども。遁げよ
けり。中。若武者。進み出でて。きり懸
つて。ちやうと切れて。ひらりと飛んで。

手もこゝより。忽ち勝負を見せま
けり。今。景清。これもどありと。少
竹念を致つて。かのあざ丸を。か
さざせ。霧立。隱き。春日山。飛
みよ飛びの。薩うち。又。と。時
節を待つ。けれど。虚堂よ聲にて
失せよけり。

忠信

解題

註方梗概

なし

別名を空腹ばら、吉野忠信、矢倉忠信といふ。義姪吉野を頼みて身を寄せたるも、飛捷に逃はれて再び外處を尋ねたら時、佐藤忠信主命を奉じて一人徒に留り、橋に上りて防矢を射、やがて虚報を斬つて後の谷に落つちと見せ、追手と戦ひて主君の後を慕ひて都に上りし事を作り。能本作者註文及び二百十番謹目録にせり跡作とあれども古き記録を見す。

吉野静と似たれども、彼の舞歌に代ふも、此は社士の武勇を以つてしむるものかれば、健やかに雄々しくかるべく、その以外さて往心持とソハ程のものか。

先づワキの案内に依り、「誰ひてわたり外ぞ」と何事なく確りと強みに應へシレ」との問答に入り、「御宿異つて承りゆ」ちとは落着き有りて大きく言ひ、「御意をはいかゞきは確りとおで、皆人々に御名残こそ惜しう外へ」と調子内へ取りて静に心持して註り地に渡す。過して懇懃たまらばならべし。忠信様には御禁しは火とく鎮めて思ひあらままで種ふ。彼は偏に所はからんで。今は夜更けと云は威有つて確りと言ひ、「あらはかく」しやうとは氣をわりてかつしりと出で、北天一條受けて見よ」と強きとがつて地に渡す。其際、忠信はは氣持ひぬやうやう。

ソレ（判官）はかり驚きたる趣に問ひ返すべく、「口惜しや」とは確りとして席を下に取り、次句より再びきらりと立ち、シテとの問答にていや故を蘊む上は「ちとは決意あら心たて確りとかつて言ふが宜し。ソレ（法師武者）運び好く度ますた誰ふが好し。次のいかだは坊中へ「ちとはかゝつてきらり」と、わらなく云ふ。テキハキと言ふ。

アキ（アキと言ふ）も一息地。初の「不覺の渡を折へて」ちとは、シテの心中をしつくりと註り表し、「とまれば」はシテの心持を承けて少しそれだけ、「舟供た參らすは」とさらりめに不思がるべし心得よとと物かかつて確りと、渡を流させ給へは」と調子を内へ取つて心持し、以下さらりめに語りて静に止む。彼は高橋にきりあり、あこ産を大承けて返りあり、強くからりと註り折き、うるめなりける」と一旦船の波のと力を抜き持ちてと出で、轟を引き立てて力を持ちて進ふ。敵の兵よ

四番目

忠信

十一月

法師武者
源義經
佐藤忠信
伊勢三郎

ツレ從者

辛酉
このへ判官殿のち内よ。伊勢の三郎
義盛もそひ。さても我が君判官殿。此
吉野を頼み坐座の所よ。衆徒の詮議
變り。今夜夜討もぐた事十室のやす
よ申ゆ向。此事申しよげ。也やとなは。
いよ申しよげ。義盛がまうてゐ

此方ノ來アリ。且マサニつては。唯シテ今ハ何ノ為ス。來アリ。あるぞ。左ハんは唯シテ今ハ是ガ事ト。餘ハ儀ス。あらざム。當ダ山ノ者ヲも。心ハ變ガ。今ハ夜ハ夜ハ討メ。其ハ事ト。是ガの事ト。よ申ハシメ。向カシメ。其ハ事ト。レバ。其ハ事ト。爲ス。まつては。シテ、貞モ。あら。左ハんは。口クチ惜シ。やわれ。い。ぞく。難ハシメ。を通ハシメ。今ハ重シ。き。事ト。も。朝敵タキの虛ハシメ君ノ。晴ケル。其ハ為ス。あり。そへ。よ當ダ山ノ衆ト。徒ハシメ使ハシメ討メ。其ハ事ト。告ハシメ。知ル條ト。そへ。ひそハシメ。よその。所ト。加ハシメ護シ。あり。そよ。かく。よ。わい。ハ。便ハシメ。よ。此處ト。用ハシメ。が。誰ハシメ。二。人ト。留メ。防ハシメ矢ヲ。射ハシメ。其ハ後ハ。命ハシメ。金ハシメ。て。躊躇ハシメ。よ。も。追ハシメ。づ。者ヲ。

あつ。義盛計らひし。早
御詫罪つて
承り。はなうあづら。其を殺の皆ひづく
までも阿供とある。けん。ばくあづら
誰よも。ひし。出でて。直よ仰せ附け
られよか。と在り。レモレトモあづらが
思ふ所あ。さうじ佐藤忠信を此方へ
と申し。畏つて。いよ比家の内よ

忠信のわたりゆ。誰よもわたりゆぞ
早。君よりの御使よ義盛がよどて。少
一箇のまよび。御まよわいとの御
事よそひ。畏つて。早。忠信あつて。ひ
しよ忠信。當山の者よび。變つ。今夜
便討を。じたま。一室のやすよ申ひ。さよ
ざよわい。便よ。此處を。用ひべ。

世人留まり。防矢を射。其後命を全
うして。路次よりやどても。走つてまひへ
シテ 駆詫畏つて。乘つて。かくあら。其事ハ
どうくも。もむか供す。かく一具せられ
ゆひて。餘人よ行せ附せらるひ。わ
辭一申す者あらば。其時意をば背
かれゆき。まゆ。ツレ川や。世を頼むよ。

シテ 刑意

とあるの事は。あるが。こひ
をだ。そぞ背ふ。か。志がもて。懲まれ
申し。防矢は。その度。弓矢取つての
面もあれば。添うとも。そよがうあら。
我カ君を。おめ事り。皆人クニよ。か。君殘カニ
とを惜カニ。うゆへ。不覺カニの度。を。持
へて。度前カニを立つ。皆哀カニよ。覺ゆる

上
かゝり時刻移る。かゝり時刻
移りと我^ガ君を詫^{ハシマ}め奉り。山前を
出で向道より。密^{ミツ}山のび生^スて経^{ハシマ}る
忠信軒^{チョンシンケン}入^ル、脚供^{カツコ}
まへ。かまへて命^{ミメ}を全^シう。かまへて命^{ミメ}
惜^シよ無^ムもん。不患^{ハズ}あらず。一心得^{ハズ}よど。
後^ハかく氣^キせ経^{ハシマ}る。かたづけありと患^{ハズ}

物著入中又

衆セイ告々
ツヨク
古野
水のまよ
駆ぎ来て。波
うち寄
まよ。風
かち
打上
立東阳

中へ寄る内申は
今ハ夜更け人静
シテ

立衆
やうすく頼朝よりの作。大セ
はるひ。當山の

者ごも判官殿の御迎ひよりありたり。
疾うへ出でさせ給ひべ
あらはか
がくらまき
さす。や余も我ら君よ思ひからん
とや。ようまう軍の試よ。此矢一條受
けて見よと

高櫓よきりあがり。中差取つてうち
つがひ。ようひとねつをよ。直先かけ
高櫓よきりあがり。

たる武者あまた。一矢よどぎと轉べば
目を驚かし。肝を切れて一度よどう
とぞ纏めたりけり。刀を抜き持ちて。
刀を抜き持ちて。う手の脇より右手
の脇へ。文字よわうとぞ見え。う虚
腹切つて櫓よう。後の谷よそころび
落つ。主敵の無ふれを見て。よれや者

さも首を取れ。一度よそうと寄り。
打ち破り糾れのり。喚き叫んで震動が
きれど、シテナシ其隙セキよ忠信チヂムはセキ其隙セキよ
忠信チヂムかねて用意ヨウイの小力コトカありそり
密ミツよ土トのび出ハタケルて。茨アシガからだち。分ハラフけう
くさりつ暴ハタハタひゆくや。怪アリしる者モノありて。
あひいよと呼ハスルすくれど地ジよ伏フ

一隱ヒカルへ。聞きシテを便イシタよ忍シテんともうを。
廻アリもまどとてきアリつて拂ハラフふと見ええ
一エニが直アタマ筈ハシわられてうつよあれば。續スルく
久クモリを力カツす。打ハシルを力を受け流ハシメル
諸膝ハラハラかけて。切り放ハサフ一通トトロて。今ハナシト
よと遙ハラハラの谷カニを。蝶テントウ鳥トリの如シカよ飛び翔ハスルり。
蝶テントウ鳥トリの如シカよ。飛び翔ハスルり。都シテをす

「おまえの心が、どうして、こんなに、

烏帽子折

解題

解題　右く現在熊坂ともいふ。辛若丸全壹を次を種みて奥州に下ら途次、銃の宿にて鳥情子を折ら
せ、計らずしも鎌田兵衛の妹に逢ひ、又赤坂の宿にて跨盜熊坂の長乾を斬り、一章を作れり。
希前日記に永享四年三月仙洞にて九郎判官東下向を窺ひてなりと見ゆるは思ふに此曲を指すかもべ
し。二面十番櫻田歸人宮燈作とあり、又名寄に言次（一名信高）とあらは此曲の綱名にや。

卷之二

解題
希朝日記に永享四年三月仙洞にて九郎判官東下向を演じたりと見ゆるは思ふに此曲を指すかもべし。ニ而十奇謡日記に寫入作とあり、又名寄に吉次（一名信高）とあらは此曲の假名にや。
謡り方梗概
鞍馬天狗の後篇とも、ふべきもの、總して色號を附けず、既健を旨とする。
前シテ さて往々取らず、すへて重りと言ひ、問答の中、「これは仰にてゆへども」は折へて出、幼き人の「おまかせ」を引き立て、地に處す、「かうに祝ひつ」は上端の如き調子に扱ひ、次の詞「日本」には折へて確りと言ひ、問答の中、「おまかせ賜はらうするにせば」は下に取つて静に、「いかにわたりゆか」と氣を更へてシレとの問答に移り、「動き人の」は火「さらりめに扱ひ、「よほら見事」なる代にては「なまきか」を確り一息向を取りて、「あらかず」を抑へて、「さや」を抑へて、「や」と少く向を取つて出で、「未だこれに御度りよ」と抑へて確り、其後を火「さらりめに言ひ」人達へおまかせ「さうの連吟」は詩に、「ロング」は別を惜む心にて、本篇中單も静た龍ふべき處とす、されど先みでは却て宜しからず。
後シテ 住太きく確りと、氣勢十分に稍荒き程に扱ひて熊坂長範の面影を寫す、シレとの問答はよく文意に從り、力を籠めて是をよく強々と差け渡し、漁りき夜討の様を彷彿たらむ。
前シテ おまかせクリの調子にさらうと出で、アドキを心持して稍一ゆかに然もたれぬやう落び廢け、其止めの「あら淺ま」やけを内へ取りて心持す。次のシテとの問答及ば予方との對合は普通のシレの住たるべし。
後シテ 「寄せかけ」と云ふの一聲は十分に身好く連れて龍びシテとの問答はシテの意氣と相應して健やかにハキくと應ふべし。
方 謂に心持、接などは附けず、調子高に繰り返すことによく連れてキビくとあるべし。
ワキシレ 軽きやうふす地
車をしおとは稍氣を更へて應ふ。
ワキ 軽きやうふす地
初の下歌は更へて稍さらりめに出で、う主従と
うべきは火「かゝつて言ひうこれは頗るしきりと
うりと扱ふ。

ワキシレ 軽きやう本守地
らりと振ふ。

宿にて賄益熊坂の長範を斬り、一車を作れり。
寅（うらわ）たりと見ゆるは思ふに此曲を指すかもべ
名信高（しんこう）とあらは此曲の假名にや。

前シテ

さて往々取らるず、すべて重
くればが宣（のぶ）し。先づ「誰（だれ）」にて
「う」これは仰にて「へ」とは折へて出、「幼き人」の
「十今」にあり、漁次に物小氣（ものごた）を束せ、終の力、ル
「調子」に振り、次の詞（ことば）日本一（ひにちい）には折へて確
くは下に取つて静（しず）かに「いかにわたり休む」と氣（き）
「さらりめに振る」、「よんばら見事（みめいじ）」代にては「代にては
「へてさらり」と出づへし、「クトヰ」の次の箇（く）は確（たしか）
「う」と、「や」と少（すこ）少（すこ）向（むか）て取つて出で「未（ま）たこれに御
走（なま）らげ」ちの「連吟（れんぎん）」は辭（こと）に、ロンギ（ロング）は別（べつ）を
往（むか）く確（たしか）りと、氣勢（きせい）十分（じゅうぶん）に稍（すこ）荒（あら）き程（てい）に
振（ふ）いて熊坂（くまさか）長範（ながはた）の面影（めいえい）を寫（う）す。シレとの答（こた）
「若（わか）に然（しか）れどもやう心（こころ）すべし。」
調（ひらめ）きを駆（か）か高（たか）めに取（と）りて素（す）直（じ）に振（ふ）べきし
及（およ）び子（こ）方（ほう）との對（たい）合（あつ）（口普通（くふつう））のツレの往（むか）たるべし
一聲（いっせい）は十分（じゅうぶん）に勢（ぜい）好（こう）く運（う）びて龍（りゆう）びシテとの
子（こ）と相應（あわせ）して健（けん）やかにハキ（ハキ）くと應（おこな）へし。子（こ）
位（い）等（とう）常（じょう）に確（たしか）りと龍（りゆう）。後の「これは何（なん）と仕（し）
けべき」は少（すこ）しきつて言（い）う。これは頗（ほんの）もしき
初（はじ）の下（した）最（さい）は更（さら）へて稍（すこ）らりめに出（で）う主（ま）役（えき）と
なるぞ悲（かな）きこと鎮（しづ）め、上（じょう）歌（うた）は出（で）て確（たしか）りと

卷之四

謹ひ、「駒もとどろと」トナラシラリモ運ぶ。二の地「出羽の國の守が」モコハ更ヘモ篠やかに附け、代に出で給はん時よりさらりとなくして漸次たゞき立て行き、「平家一族の」と確り、代となりぬるモ難シキ」と内へ取り、其後を又さらりと、「程たゞく」以下は晴れやかに謹ひ、「これもうち矢の」より確りと鎮めて止む。次の「身のうちもはての」モコハさらりと取つて、様れば主従と「より縁もべく、ロンギは氣を更へて稍しつとりと」たる味はひに謹ひ出す。此御屏の物を「モコにはあくつてさらりと附け、「われもしもせに生づまうば」と確り、其後を度して謹り納む。後の「間を作つて」モコにはさらりと附け、「あら物々」や「モコとは寛りと大きく出で返し」より氣合好く火一束り調子に謹ふ。「熊坂の長範六十三」モコは軒かゆらやかに確りと起して返しより鷹揚に謹り行き、「いかゞら天魔」と確りとわくる。「あらはふぐ」を「モコは心持を變へて少しく静んで、返しより氣勢鋭く謹りつづけ、「八方拂やし」下位を遣め烈きやうにあらべく、「打物業」にて「より」モ兼つて房主に當り内びべし。

注音法すべき讀り方
あれど上の入の音位キ
チ葉ノに落す。

子方の謹の中、二枚表の「今日」を始めて「オ」の入はえ来サシの調子かれ
は單に浮キに罷ふべきやうもと、入の筋形に扱ふものなり。されば入とは
で罷り上げず中音の入の高さ即ち上の浮キの高さに止めて次の「モ」を

辭辭 末も東の云々 角田川の次第「末も東の旅衣日し遠々の心かなよ」を少一要へて、遂速
床も東の云々 うちも東國の旅に心の急がらく様を述べ。東は東國の汎稱。旅衣は旅
行く衣、日も(紐)遠々(張) 行く衣、日も(紐)遠々(張) 三條の古次信高
も(紐)遠々(張) 三條の古次信高 平治物語に「奥州の金商人古次」と載經記に「三條
も(紐)遠々(張) 三條の古次信高 に大福長者あり、其名を吉次信高とぞ申一けら。
毎年奥州に下る全
商人なりけり。 駄馬に高々と
高荷 繰みたる荷物。
東國街道の 松坂 栗田口より山科へ通す
門戸も(紐)。 松坂 ら坂路。日岡の一名。
よりいふ。 滝水北方より來りて北村
を過ぐる邊を四の宮河原といふ。 逢坂 云々 近江國大津市の南なる坂路をいふ。此山もと山城近
の間あり。一ノ峠。 関路の駒とは重之の駒。 逢坂の間の清水に影見えて今
や引くらむ望月の駒にようて云ひ慣れたう詞をす。 関路を行く馬の謂。 菩栗屋の床 云々 逢坂の間
を過ぎてこゝに駒び住まひせり。 菩栗屋の床 云々 大津市の大津の南、今の膳所村。
菩栗屋の古を追想せらる心なり。 菩栗屋の古を追想せらる心なり。 菩栗屋の古を追想せらる心なり。

風雅集に、賣物苑えず供ふる東路の脇田の長柄高もとくら
らに、勢田の長柄は勢田川大通にて東海道に通すら長柄なり。野
守山 古今集の歌、白露も時雨もいたくもら山は下葉残らず
漏ちを守山にかけ、更に下葉色照ると轉す。守山は

鶴田の東北一里、今栗田郡老上村
に屬す。野路の縁にてヲ露と米
色づきにけりしを引きてヲ露の
邊に野洲郡の一驛なり。一に森山。

夕月夜を鏡に見立て鏡の宿を呼びます。鏡の宿ら元服したる出づ。年齢物語に「生年十六と申す。承安四年三月三日の曉、鞍馬を出たてて後、手づりを取り上げて懷より鳥帽子取り出し、いたと着け親もなければ手づから源九郎義経とこそ名乗り侍れ」と云ふ。

鉢山村といふ。牛若比宿にて手づか
こと平治物語、源平盛衰記等に
(中略)其夜鏡の窓に着き、夜更
りて打出し(餘へば(中略)鳥帽子
又は事柄。こゝには
知らする多、度をきす。 烏帽子

武士の被ら打鳥帽子、又侍鳥帽子ともいふ。鳥
情子を着」とは童形を男姿に更ふる爲たり。
番号。左折は鳥帽子の頸を左に折る折り方。平家は左に折り、源氏は
右に折る。朝石城山の合戦大打負け逃げゝ時、遂に太郎といふ鳥情子を
朝一人にのみ左折にしたれば頬朝妻びて、いへら言ひの中に源氏の先祖八
黨家代々の大將軍左折の鳥情子なり。今流人落人の身ながら之を
東男 鄙びたら
東國人。

三番の左打 三番は鳥情
は左に折ら敵寶なり、源平歎哀記
兩人に鳥情子を折ら一め一に極
情殿は左鳥情子を着給ひより、
着ちこそ有りがたけれ」と云ふ。
郎義家 源頼義の長子、八

八幡太郎といひ、康平五年父に隨ひ安部貞任を討ちて之を亡んせられ、永保三年陸奥守とがり、鎮守府將軍を兼ね、天祐元年六十八歳歿。陸奥國の蒲長頼の子。父と共に陸奥を押領して朝儀與任命に渡はざりしれど、源頼義の東攻に倅ひて戦死せり。

六
情社前に加冠し
六
六年功を以て出羽守に任
職にて卒せり。 安
宗任 暫任の弟。権義と戰ひ軍
殿れて降り、義家に愛せ

うれしが、康平七年伊豫に放たれ
後信とがりて筑紫に移れり。上洛
陸奥（奥州陸奥と
いふ大國也）。御世に出羽（音
御世に出を出羽にかく。
といへるは義家の後宮
仕合せよ。祝言（祝賀
引出物（賜物。上古祝宴などをに實す
報）

され 大いに喜び陰り
といふ様の意。 奥
くに出羽守陸奥守
なるべよちなるべし。 脚果
客に馬 保元の 西 崇徳上皇
のいふ。 悪左衛門

長と謀り源氏義等を名して鳥羽法皇の崩御に来て兵を起したまひしを保元の亂といふ。平清盛北亂に功あり、之より次第に頃榮の地に上り、平治の亂を経て平氏全く裏へしかば「保元の其以後平家一洗」と云ふと作る。よつゝそれとても云々假令源氏衰へたらとも前代に忠勤を盡し、後栗の現れ時機もあら折知ら。折知ら 時節の意なる「さり」と鳥帽子櫻。子を折ちとて云ひ兼ね。

鳥帽子櫻 腹曲元耶當我にさらば元の折時めくをりに来て、鳥帽子櫻の花を見んことを作りたるがたり。松屋筆記に「今常陸國の腹元服するを鳥帽子櫻といへり。是も元服して鳥帽子を着初むるを本の格に寄せて風流にいへりと見ゆ」とあり。かくら名の櫻ありきとも思はざれば、或は松屋筆記の説をとるべきか。三色組 云々赤青の三色を交へ組みたる鳥帽子の組。

高く 好く。御ぐく 髪の髪称。岡本一 に用ひし時代譜。代り 金。野間の内海 今に用ひし時代譜。鎌田兵衛 義朝殿院の家臣。保元物語等には野間は慶くして今の内海町とも乞有せたり。鎌田兵衛 誓願と同トく山清、平治物語には政家とあり。其妹を鳥帽子屋の女房に作。常磐石腹には二男 が義朝の妻となり三子を生む。うち一たちは龍也作者の技巧たるものべし。義姫は其二男なり。源平盛衰記に義姫の妹にて頼朝を訪ひて名のりと言ふに「是は故左馬頭殿の子息九條曾子(平治物語に雜社)常磐が腹に半若と申侍りしが」と云ふ。常磐は九條院の雜社なり。朝を指す。言葉通断 言葉にいい現し得ざる。こんなにどう 据りとらる明ならず。伊勢刀の名の如く作られたれど、鞍馬寺 東光坊阿闍梨蓮恩弟子禪林齋鶴梨の半脇にあり。平治物語に「半若は京都の北三室はおり、なら鞍馬山意なるべしとあらゆなれど如何。腰の物 刀剣の類。鞍馬の寺 の半脇にあり。平治物語に「半若は少人 年少の如くは主性もからぬといふ種の意。」

行方も知らぬ これは主性もからぬといふ種の意。少人 年少の如くは主性もからぬといふ種の意。月影のうつろひて薄れゆくと、うつろの縁にて鏡にかけ、鏡の宿を旅を飾磨云々旅をして飾磨大かく。飾磨は播磨國飾磨郡の町。古來より褐色(細出で濃きもの)に岸のたる布を産出せり。より飾磨のからちといひからちを出す。旅を飾磨云々

徒歩はだして掛く。熊野の誰なし。世の為身をば捨衣（元）
（源氏衰微のせの鳥に身を捨つる
身を掛け、衣に掛け、衣の縁をすり聚
みと漫く。）力なり。（止むを
得す。）美濃の國（を美濃の國に掛く。）やつれ果てたら身
詠合（相）。やはか（いか）。面々（人々）。人々。うには對者等
夕も遇きて（向ふべしといふを夕べに掛け。夕も。現（現）。衣（衣）
（兵庫の私物を頬すを
現く衣に掛け、衣の縁
詠装の上に現らるをいへる詞など此には辭の連鎖に用ひたるままでして意未よし。）
是白波の序。白波は盜賊の異称。後漢の董卓の賊、五河の白波谷より起りしに
すり時人白波賊と称せられ其多く一打入らは波と盜賊と云ひあけたり。）
白波の寄せ打つ音の高きと 盗賊の勢の寄せ
來りて夜討をする聲の高きとそ並ぶていふ。内（内）の風は、（し）遠い水
かの意。投松明（内）の様子を窺ふ鳥蝶鳥（身軽に敏捷な
に投げ込む松明。蝶鳥）。身軽に敏捷な
鶯（声）。曲者（声）には怪揚
の聲。松明の占手（即ちウケにてある
かてよな）。物々（即ち山なりと
かては負けにてある
かての意の嘆聲。物々）。松明の占手（即ち明を投げ込みて其燃ゆるを
見する。御知見）。御知見（照覧。）。坂の
長範（異本義經記、雜々拾遺などに生づ
れど正確なる古書に其名見えた。）。わほどり歩み（躍り歩みの延音。謂
子に乗つて運ぶ歩。）。は
かぐじや
いふ程の意。めだれ顔（化を軽くじ切
ら顔もち。）。さそく（早速の字にて曉機
の處置の意。）。腰車（腰斬り
の意。）
十方切（以下何れ斬り候ふ様をいひたる古き俗諺を引き列ねた。）。腰車（腰斬り
の意。）
獅子の齒（かみ）。かみ
今戦の條に「殊勝ら」やと
恐く々怒り極ら形容に用ひたるは太平記赤坂
獅子の齒（かみ）。かみ
令戦の條に「殊勝ら」形を乍ら古き俗諺を引いてある。ものぎを削つて
に力

ひて烈しく斬り合ふさま。吾我物語たゞ一のきをけづり合
ひてし。一のは刀の刃と背との間にある一條の高き筋。御曹司牛若を
刃物にての
の斬合也。

五番目
畠二番
四番目二モ

鳥帽子折

九月

子方牛若丸
ツレシテ鳥帽子屋ノ妻

後子兵衛(天熟)
後子熊坂長範

ワキ三條一吉次

墨第吉大

蜀峰上
まも東の旅衣。まも東の旅衣。日も
遙と急ぐ。これに三條の吉次

信高とも。われ此程數の財を集め。
第主には吉六を伴ひ。唯今東へ下りる。
いよいよ十六。高荷ともや集め東へ下
りまくる。秦油が得申ぶ。やど

かくちあはれのまゝに呼掛子方のうへ
あるある旅人奥へ向ひりゆだど。馬供
申ゆそん早易かき間の馬事よそくへ
すも。かはせと見申せ。師匠シヨウの手を離れ
絵ひたらへ見え申しては程よ。思ひ
わよらぬすよし。
「やあいよん
父もあへ母があへ。師匠シヨウの勘當カンドウ蒙つ
なれど。唯伴カニテひて行き給へ。此よん
辭シヨウ馬マ申マサニまよ及シテまシテ。此馬カニ笠カハを集
らきれべ子方
牛若ウガツとの笠カハあつ取ヒカルつて。
今朝キタハぞおめで夏アラハみ旅リョウよ草原中
ね坂カニや。田タミ原ハラ連坂カニの。開踏ハラハラの駒コトコト
の後アフタよまきそ。どうう高タカ人の主從シテツと
あまきそ。上乘カサウ。蓋屋カバヤの床シロの主シテ。

蓑屋の木のまへ。都の外の裏腹をほ
まひ。^{え入}と今思ひ粟津の原を
うち過ぎて。駒もどじろと踏みあらう。
勢田の長橋うち度り。野路の夕露
宇山の下葉色照る日の影もかたむじ
くよ向のみ月夜。鏡の宿よ著きよ
けり鏡の宿よみよけり。意をひく。

程よ。鏡の宿よ著きて。此處よ身休
みあらまう。まうよ。」^{在言}
^{千方} 唯今の早
すきよく。向まうべ。あれらは身の
よて。比も。よそハ高トます。意を
髪を切り。鳥帽子を著。東男よ身を
やつして。下らぬやと思ひ。よ比内
へ案内ゆ。 誰もわたりゆぞ

鳥帽子の所望よりまことに。何と
鳥帽子の所望をどや。便中の事
よそほ程よ。明日折りて来るせうござるよ
てふ。意きの旅よほ程よ。今宵
折りて賜ひうへ。シテからだ折りて来
らまうだまくは。まう此方へ廻ひうへ。
さて鳥帽子に何番よ折りたゞか

三番の左折よ折りて賜ひうへ
シテからだ行までうへども。これハ源家の時
よそほ。今ハ平家一統の世よほ程よ。
左折と思ひよほ事よては。乍ハ
充満しては。思ふ。思ふ。手續のに向。唯折り
て賜ひうへ。幼な人の御事よて
は程よ。折りて集まざらまでは。此左

折の鳥帽子よりして。嘉例めでたす
物語の語りて聞かせ申なす。まよ
て。子方からば。物語りへ。さても
某が先祖より者。元は三條鳥丸よ
り。よど。其頃。ハ陽太郎。義家。
安信の貞任宗任を謀害。罰あつて。程
なく都上京あり。某が先祖よそ

者よ。此左折の鳥帽子を折らせらる。
京よ。唐出仕。あつて。時。帝。もの。よ思
り。其時の恩賞よ。奥陸奥の國
を賜つて。わくらむ。其が。嘉例
めでたす。鳥帽子折りへ。此鳥帽
子を呪なれて。程なく。ちせよ。地主
國の守。陸奥の國の守。よからせ給

ちくに腹累報あつて。せよ生で絵もん時。
祝言申し、鳥帽子折と。なされてめで
たまうト出物賜とせ給へや。あをれ何
事む。昔ありけり。鳥帽子の左折の
その盛。原草兩家の敏翁昌花からぞ
梅と櫻木。季をも春秋月零の
眺めづれぞと。争ひ一よやとのまよ。

保元の其以後。平家一統の世をあり
ぬとぞ悲き。それとも報あ
らぞ。せむり。時來り。かう知る鳥帽子
櫻の花絵。かん頃を待ち給へ。ち。かや
よ祝ひつゝ。程あく鳥帽子折りたそく。
花や。よ三色組の鳥帽子懸緒取り
す。氣高く結ひもあり。呑まれて處

腰ヒザへと。お髪カツラの上アベよりうち置シテきよち
艮イニシを見て見ル。又アフタ晴居畠量アキハラノリヤウや。とれぞう
その文シテ持シテ申シメとももなしよもあらう！

日本ニホン一イチ鳥帽子トリハコ以シテ合ハセひ申シメては
子方チカガ此刀カタハを無ナシせり。まうよては
トヤマトヤマ鳥帽子トリハコの代カタハにまうての程カタハよ。
思シテひわよシテ。子方チカガたゞタツ即アマタツ取ハシメりへ

かくべ賜タマフたまタマめど。だくそ妻シテ
主シテ者シテの悦ヨロシびヒだら。しよわたりシヨウワタリが
何事シテよシテ。幼シテき人の鳥帽子トリハコの
廬所ルブ詔シハシと仰ハシメせ。程シハシよ折ハシメて氣ヒをせ
りべ。此刀カタハを賜タマフては。あんぼう見事ミタシ
ある。代シテあむか。よく見て。あら
不思議ハシタや。幕カーテンの事シテがほどの興ハシメす

まことに思ひ繪をぞ。されど、と落後へ
何事よそぞツレアヒ。恥がタモニや申すんと
きれいの葉よう。まづかみだつは後アヒタシ
あり。今ハ何をうつひばか。といへ
野向の内海まで黒て繪ひ。鎌田
兵衛正清の妹タチ。常盤腹タガハシ三男。
牛若子ウガクシませ繪ひ。時頭の殿トモカミ

此節腰の物を。ア穿刀よどて糸らすを
繪ひ。其馬アシ使スル。わらを申して。まし
う。痛アヒ。やせぎせよも。まよ
あらかく。憂アヒ。目アシだ見スル。かの物モノを。あら
あらかく。やはアハ。何と鎌田兵衛正清
の妹タチ。侍アシ。言アヒ譜道断。
此年月添アヒタシ。未アシらむ。今あらぞハ

承らる。さて此馬腰の物をもと見
知り申立ては、ツレどんねんだうと
申まよ。腰のものよ。シテげよ。承り
及びたる馬腰のものよ。さて、鞍馬の
まよ。座り。牛若殿より、座るが。
たあらが坐つつき此馬腰のものを、
らせ。おれもわたり。や。まだ
されよ。座るよ。よせのひう。此馬腰
のわを見知りたるよ。申る程よ。足チカタ
上げられて、絞らう。不思議や。あ
行く。も知らぬ田舎人の。あれよ。情の
猿サルあやや。人達ヒトダツからお許アリあら。あ
鞍馬のかた。牛若殿と見事りてはあり、
げよ。今思ひ出シモた。も。ふ清クレ。

かうの者か。門目の程のかくとまよ。
わらやと鎌田が妹よ。あそやの前が
ツレ^ト子方^トげよ知る理^トわれとそれ
地上^ト身^トあるはての半若丸^トがひもあき
今^トの身^トを語^トればま従^トと知らう^ト事^トぞ
不思議^トある。おやはやまのゆも明け
行けばはやまのゆも明け行けば是^ト

もだ残^トの影^トうつる鏡^トの宿^トを立ち出
づる^ト浮^ト立^トの所事^トや。さとも高^ト
き^ト身^トの高^トと併^トひて旅^トを飾^ト磨^ト
を歩^ト跣^ト足^ト目^トもあらぬ^ト高^ト風情^ト
時代^トは變^ト習^トを。せのため身^トを
捨^ト衣^ト忍^トと更^トよ思^ト。キテ下^ト東^ト踏^トの^ト
はるむけれど思^トめざしてこそ^ト此^ト序^ト

腰のぬを強ひて氣を上げけれども。力
ありとて請けたり。われ若しも。せよ出
づまくも。思ひ知るべく。かくとも。高
くと伴ひ更愛を旅よ。やつへはてたる
美濃の國赤坂の宿よ著きよけり。赤
坂の宿よ著きよけり。

早朝

中入

吉六。此處よ宿を取つて。裏つて。

早朝
といへ。何と仕様も。あれらも是非を

辨ぐま。而して何事を作せんぞ

早朝
かくわから。此處よ泊りゆ。此あたり
の悪黨。がむ向まつて。今夜夜討よ
討たう。まう。中程よ。まう。の談合
は。子方。たゞひ大勢。あつとも。表よ

たしん兵を五十騎ばかり斬り伏せ
あらがやもう。其の事へはす。
頼も。ま事を行せらるのを。悉皆
たのみ。子方 雨カミと武具ムツとて。待ち給ひ。
われ大年オオニより向シテ。と。外スルべも過
ぎて。鞍馬山エリマサン。又アリひ過ぎて。鞍馬山エリマサン。年
賀カハ。兵法の術を今こそ。懐メモリ。

妻の妻戸えんとを。開ハシメテて。中ナカニ白波シロバの打ち入
口ハラを。摩マと待ち居マサニたり。打ち入りを遅タリ
と。待マサニ居マサニたり。後後ハシマヒ天熟アキ上ウエ早鼓アラガ
白浪シロバの音高マツラく。鬱マツラを作マツラり。騒マツラきけり。
よ。若者マサニも。後後ハシマヒシテ前マサニ大年オオニが
あつと。開ハシメテた。内の風マツラ。早マツラいが
さくば内の風マツラ。早くして。或マツラ討マツラたれ。

又ハ重キ負ひたる事無。不思議やあ
内より古次ノ弟もそぞらあつまへせり。
さて何者うあつ。松本明の影より見
ゆべ年程十二三もありある幼き者。
小弓弓矢を斬つて廻りゆく。あづら蝶
鳥の如きあるよ。申す。さて増銚左郎
兄弟ハバハ文振の親方として一番
よ斬つてのゝ。例の小男わたり食ひ。
又弟の者の細首を。唯一討よ打ち落
た。うとう申す。えいへ。何と何と。かの
者兄弟ハ餘の者五十騎百騎よ。まづ
うちきりものを。あく。斬つた。斬つた。
彼奴ハ曲者よ。高瀬の四郎へこれを
見て。今夜の夜討裏をあらわん。

思ひり。手勢七十騎とも思ひて停り
てふ。彼奴ハ今は始めぬ臆病者。さそ
ぞ智の占キハいよ。一のね明ハ斬つて
薩。二のね明ハ踏み消し。三の取つて
投げ返しておう。三つともあら消え
てふ。三つともば事よ。それね明の占
キをりつむ。一のね明ハ軍神。二のね明ハ

時の軍神。わからぬ。命あつて。うとう
あづら消ゆるあらば。今夜の夜討へたて
よま。御宿のかく。此まもよそへ鬼神よ
てあたまつま。くる。唯是(アシテ)御守り
は。げよ。監も命のあつてこそ。
ひきと停らす。たまひ。シテ。や
熊坂の長範。今夜の夜討を仕損

●獨吟
よまつてぞ待ちやけたる。長範カリ六十ミナニ三。熊坂の最期カリの夜討せんと。鐵腹カミをあらぬき捨て五尺三寸の大きさを刀をもうちりと抜かうと歩み出でたる有様カミ。いわゆる魔鬼カミ神も面カミをひくきやうである。

ト。づくよ面カミを向くべきぞ。唯ほめられや若者カミもと。大音よびて呼むどりけり。芭^ハ舞^モス^ス作^スり。斬りてのりけり。あら物カミや己カミよ。あら物カミや己カミよ。さきよ手益カミに知りつらん。それよも巣カミうぞ打ちのカミが。、囂カミも虚カミ見あり。一人カミも助けてやらカミるものをと小口カミ打上頭^{カミ}井切

地拍子
又子熊
子想坂
坂も一

あらはうぐや 盜人よ。あらはうぐ
や盗人よめだれ顔あら夜討ひをう
さもわれよと通りものをとてまき間
あらせき斬りて懸る。熊坂も大刀か
遣ひの曲者あれどさそくをつわって
十方切。方拂や腰車。破刃の返し。
風まく。剣降らや獅子の歯がみ。

紅葉重。花ざくね三つ頭より火を出
して。志のぎを削りて戦ひ。う。純術
を盡も。火をも。曹司の小を刀よ
転り立てられ受けを刀よあつてぞ見
えたりける。打わ業よて通よす。
打わ業よて通よす。想ひでかの勝
負せんとて大刀投げきて。大手を廣

畫も大
三毛

一
げて飛んでやるを。背けて諸膝薙ぎ
絵へも軒られてからと轉びける。
起き上らんとつ立所を貞筒
ようも。窓につけられて一人と見えうる
能坂の長靴もどうよあつてそ失せ
よけ?

大瓶猩猩

解題

一に泰平猩猩、泰坪猩猩、太平猩猩、太平猩猩等の字を充つ。遼陽江に極める猩猩、酒賣る孝子に無盡藏の間壹を興へ、又辟ひて舞ひたることを作り、構想は常の猩猩と同トけられど、これは今は廢曲となり。七人猩猩(列名寄会猩猩)の前シテの段を著しく省略したるものにて現今のは直接別れたるものに非す。七人猩猩は前段二人後段七人の猩猩出づるものにて、現今のは如く猩猩が未だ半終の式とならざり。當時、被衆に喜ばれたる猿曲の持段を極端まで擴大したる一段の替えなり。観世流奥亨院二百番之外百番の猿本卷二に細形猩猩として組み入れたものは、此曲の序文に漏りて地曲名を附したるものにて、其の細形猩猩(列名寄会猩猩、楊重時猩猩)とは全く別なり。又名寄に太平猩猩とあるは太平猩猩の「ま」字と「ふ」字に傳へ漏りたるもの、同トく見事猩猩とあらは太平を元亨に傳へ漏りたるものなるべく、まあもと猩猩、丸本猩猩、丸本猩猩等のみを傳へたものは皆同系統の猩猩なるべし。

詮ノ方梗概

一聲を聞かに誰が起へ、頭をさらりと、いつもの酒を垂れけりと誰かにかゝつて地に臥す。次に向答はすうと取つて、以トを座りと言ひう延ひ落上な高風とと氣を荒りて碌くなぬやうに地に坐す。地波一奇の一宇森は嘗てよく振めた御ふ様は前半も晴れやかにすりとある。ソレベー。春日の當市は暢びくと大ききあらぐくと通じ抜け置きは確りと淮ふ。

口キ

絶へども、是處はいづくの人もと云は少く確りとあるが好い。地出で、歌かやさこそげにて折詠め、市人のわれを笑ふらんと淮ひ止む。次の「タヘの空山」には淮りと歩けて通へを

解

唐土

大瓶猩猩

卷之三

まかへて 白居易の琴と酒を兼せしには引きかへての意 潤陽の江 江の尋水を食する附近の古稱
引きといふに下の琴の彈きの意を含まむ。潤陽の江の尋水を食する附近の古稱
たく音と尋 狸 支那の漏書に出でたると綜合すれば、様に似て人面獸身、解くえ難を發し、首は小
にも作る。 狸 兒に似たれ、隨處に住む。酒と復ほきりのと好むにすり以ニ物と置きて待つに、首は小
初は必ず馬まりてきあひ、やがて真まび來りて酒を呑み、亦雁をはき、醉へば癡足に體
りてきる樂はキ、獵者之を捕ふとなり、海に住むと外れるは淫曲作者の創意なり。 天の憐みのいつ
く、泉の壺 こく には酒の自ら涌き出る壺の意。 タべの空 空ふの者七にめりの にたり(耳空)の如くの意。とは挂
御酒と聞く 云 御酒と同くおもいとはりや泉風のよみを拂りて、 菊月 菊月重陽。其は秋月とす。是土に御酒とみきとまふと見きの意にとりなす。たるをう。菊月
一重山 信濃越前即にある山の名をもとほりや泉風のよみを拂りて、 菊の壺 九月九日菊の宴などに菊、聞
物主ら千思妙なる泉 不思議を宋にて、奇にふとす。 菊の壺 九月九日菊の宴などに菊、聞
ふとす。 菊の壺 九月九日菊の宴などに菊、聞
右の菊の白露ゆき と露葉の 花を浴かべてのむ酒壺。 泉の口 泉の壺即ち瓶 くの意を情りて候く。
せつもりて洞となきん。 道院 佛道に入つたる者 道院と詮問の者と。 もとの泉に收まり 酒をつぶせ、て舟杓をも繰り言葉多く にわが
秋爽ちきの の祝言を何處 となく隠り通ひまふの意。

切能

大猩

後ヅレ
猩々
（前ハ童子）

早朝
とへり
塵土
金山の
松鹿
よき風
をゆき

۱۷۹

と思ひ。あたづみの。そとも知
らぬは向より。廻り生づる。日影が
今日の市人^{シテナビト}へ何を隠^{カム}す
嬉^{ハジケ}やからどか。よしもの酒^{カム}
を愛^{ハナメ}しき。地上豪^{ハヂヒヨウ}、琴^{クニ}詩酒^{シテル}と。向^{カム}も隔^{カム}てぬ友^{アマチ}の。
うちも愛^{ハナメ}らぬ酒功贊^{カタマリ}よ。酒を愛^{ハナメ}せり。

來^{カム}一方の人のふよもきかへて。これ
參^{スル}よも益^{ヤハラギ}。詩を作^{スル}よも益^{ヤハラギ}。唯酒のみ
の友^{アマチ}。恥^{モカニ}やれとモげよ市人^{シテナビト}の
あれと笑^{ハラハラ}。この程^{ハシメ}いざこの
人^{ハシメ}も辭^{ハシメ}。今日^{ハシメ}かとおの
が^{ハシメ}ませ。今^{ハシメ}何をかつむじだ。

いへる者あるらず。即身親より孝ありよ
よう。その懐み深ければ。泉の壺を興
へん。あ。疑ひ繪アラシ。あ。高風タカフウ。
の室も。近アリ。バ。アヅの室も。近アリ。バ。
暇申して。さくらしき。行くと見れば
さよぬうの。面マスク。赤レッド。さま變りて。常
ぐよ立タチ。絵エイ。跡も見ミ。あ。よ
けり。跡スル。も見ミ。あ。よけり。う
酒サケ。と向ミテ。酒サケ。と向ミテ。名メイも。冷クまく
秋アキの來キム。暖ヒマツめ酒サケ。と菊キク。の頃ハナシも。はや
紅葉レッドリーフ。の葉ハ。色づく。一重イチヨウ山サン薄アシカき。み
みぢ葉ミヂハ。の菊キクの壺カネ。据スル。置スル。此
秋アキの便イニシヤ。深シカクく。待マダけるよ。不可思議シラフ。や
此友シテの。キ。不思議シラフ。や。此友シテの。キ。來キム。めに。

來序中入

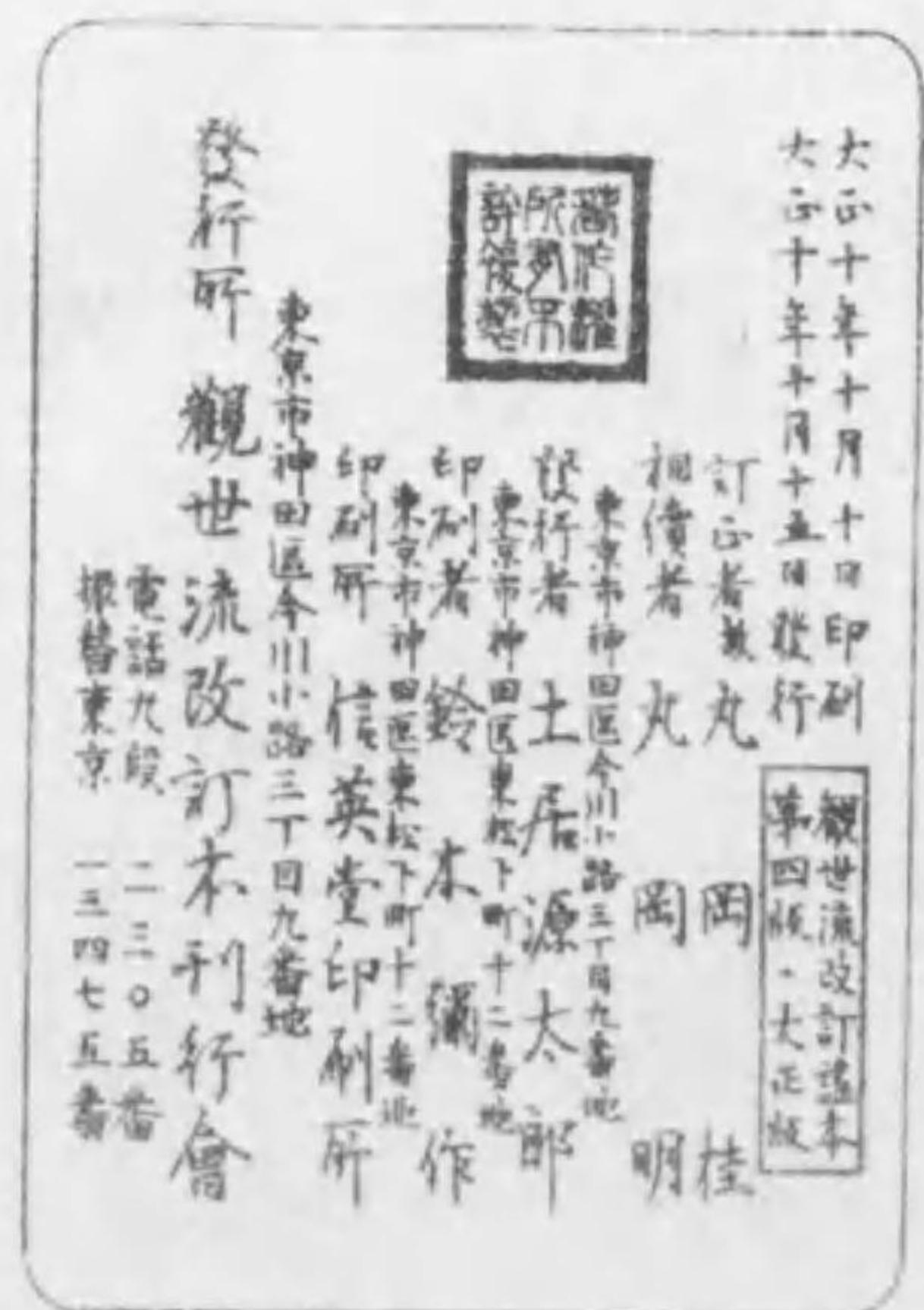
あまつかる。中よ向ひて我が友の。あざ
摩マ連ルあそり給スルよや急ぎ給スルへ友ぐ
ツヨク
下リ端(三段)
(後シテ出)
打上打返

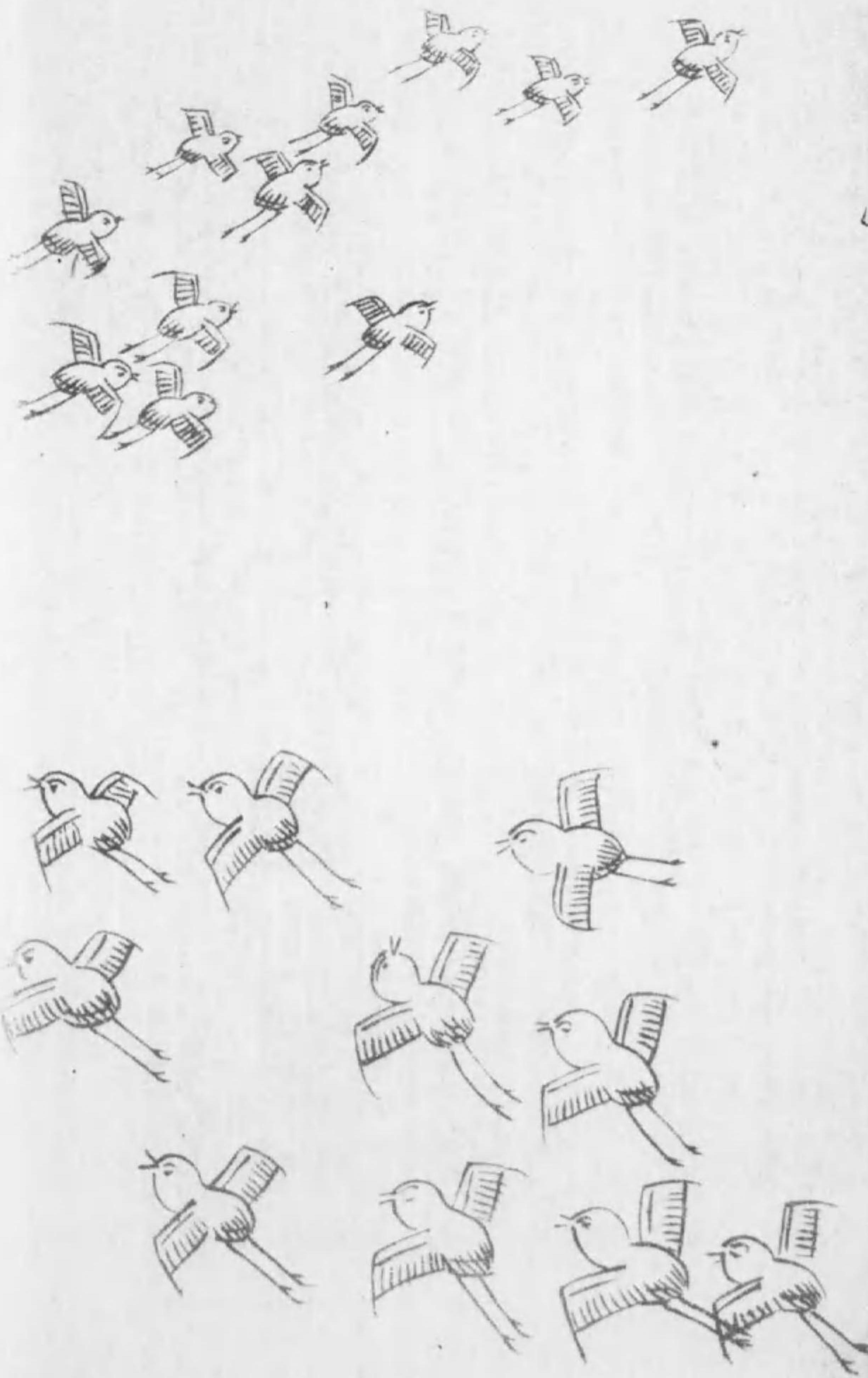
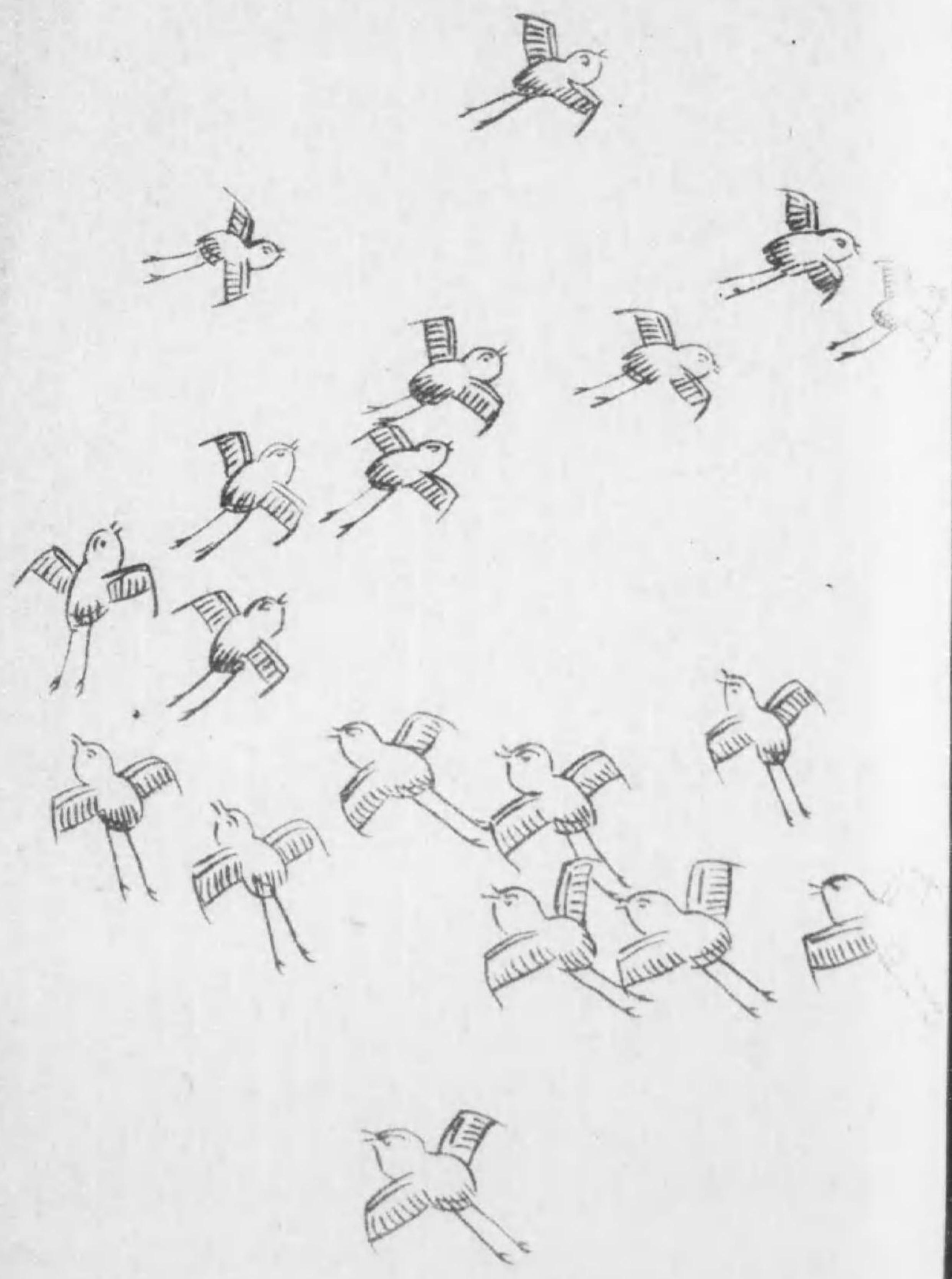
又猩マニ々マニ現ルれ出スル。又猩マニ々マニ現ルれ出スル
さきの高風マツカツ。ある泉マツカツを興スルべん
と。波マツカツ向マツカツを分ケけて清陽マツカツの江マツカツの行マツカツも
近マツカツ現ルれたり。打込打返
頃マツカツハ秋マツカツの夜月面白く。打込打返
頃マツカツハ秋マツカツの夜月面白く。丁マツカツの波マツカツも更カタマリけ

静マツカツありて。あまたの猩マニ々マニ瓶マツカツ。あがり。
泉マツカツの口マツカツを。見る。見マツカツう。う涌マツカツ。あ
り。わき流マツカツれ。波マツカツめ。波マツカツめ。波マツカツめ。蓋マツカツをせ
ぬ。白マツカツ。うれも。膚マツカツ。舞マツカツふ。と。や
菊マツカツの露マツカツ。積マツカツつて。盡マツカツまぬ。此泉マツカツ
せぬ宿マツカツよ。近マツカツ。投マツカツけ置マツカツき
ま。あ。や。醉マツカツひ伏マツカツ。夢マツカツの覺マツカツむ。と

地指子
是あぐらかわ

思へば又起さあが。命長柄の柄の
酒を。道俗男女よ残さぞ勧め。もとの
泉より納まつければ。どうれも
トテトテ。トテトテ。トテトテ。
トテトテ。トテトテ。トテトテ。
千秋萬歲君千代までと。千秋萬歲
君千代までと。禁うつ。代こそ。めで
たけれ。





終

